View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

Bull. Mukogawa Women's Univ. Humanities and Social Sci., 60, 23-31 (2012)
武庫川女子大紀要（人文・社会科学）

ハプスブルク領ネーデルラントの防衛と フェリペとイングランド女王メアリー 1 世の結婚 —1550 年代の西ヨーロッパ国際関係—

山　田　慎　人
（武庫川女子大学文学部英語文化学科）

The defence of the Habsburg Netherlands and the marriage between Philip of Spain and Mary I of England: western European international relations in the 1550s

Norihito Yamada

Department of English, School of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan

Abstract

The 1550s was a period of great transition in western European international relations, during which the "Habsburg Empire" of Emperor Charles V was divided into two parts. This article examines the motives and strategies of Habsburg leaders behind this division of the empire and considers the attempt of Charles and his son Philip to enhance the defence of the Habsburg Netherlands through the latter's marriage with Mary I of England in 1554.

はじめに

1494 年のフランス国王シャルル 8 世のナポリ遠征を重要な契機として明確に姿を現した西欧国際体系が，その最初の半世紀にどのような特徴を持ったのか，すでに検討を重ねてきた．その第 1 の特徴は，近世史家が「王朝国家」や「複合王政」と呼ぶ，国際関係の主要なアクターとしての国家の非近代性である．第 2 に，非近代的な国家の外交政策は，必然的に，近代的な国益の観念を伴わず，王朝による土地の継承権や君主の個人的名誉を重視する，非近代的な性格を帯びた．しかし第 3 に，当時の支配者達の対外的行動は，自らの個人的な信仰や宗教的熱情に支配されていたわけではない．彼らの多くは，宗教を政治的共同体の安定の重要な礎と捉え，この観点から理性的な宗教政策を追求した [1)]．

この 16 世紀の西欧国際体系は，1540 年代末から 1560 年代半ばにかけて，大きな転機を迎える．第 1 に，1547 年にイングランド国王ヘンリー 8 世とフランス国王フランソワ 1 世が相次いで死去し，1556 年にはハプスブルク家のカールが隠遁生活に入るなど，16 世紀前半に主要な役割を果たした指導者達が表舞台から消え，支配者の世代交代が実現した．第 2 に，ハプスブルク家のカールは，引退に際して息子フェリペと弟フェルディナントに領土や神聖ローマ皇帝位を分け与え，当時の西欧国際体系の要とも言える所謂ハプスブルク帝国が分裂した．第 3 に，1555 年のアウグスブルクの和議によってドイツでの宗教対立に一応の解決が得られたが，フランスやネーデルラントなど他の地域では 1550 年代から 1560 年代半ばにかけて宗教対立が高まり，西ヨーロッパは所謂「宗教戦争の時代」[2)]へと突入していく．

本稿の目的はこの転換期の西欧国際関係を概観し，その特徴を大きく掴むことだが，その際に，1550

年代のハプスブルク帝国の分割，そして，ハプスブルク領ネーデルラントとイングランドの関係に焦点を当てる．検討すべきは，(1)カールの治世末期の帝国分割は，前近代的な遺産の分割にすぎなかったのか，戦略的計算に基づいてなされたのか，(2) 1554 年のハプスブルク家のフェリペとイングランド女王メアリー 1 世との結婚の背景にあったのは，王家の威信か戦略的考慮か，(3)イングランドの不安定な宗教的状況に対応する際に，カールやフェリペは信仰と王朝の利益のいずれを指針としたのか，(4)スペイン系ハプスブルク家とイングランドの連合は上手く機能したのか，といった点である．

1. ハプスブルク帝国の分割

カールが自らの遺産の継承について真剣に思いを巡らせるようになったのは，彼が 40 歳になった 1540 年頃のことであったと思われる．カールが，母方の祖父母から受け継いだスペインやナポリ，シチリア，そして新大陸の植民地を息子フェリペに譲ろうと長く心に決めていたことは疑いない．彼は，1543 年にネーデルラントでの戦争に向かう際，16 歳のフェリペをスペインでの摂政に任命した [3)]．

これに対して，父から継承したネーデルラントに関しては，1 人の君主がスペインと同時に支配する困難を経験し, 1530 年代末に, 他の領土と切り離して長女マリアに与えることを決めた [4)]．マリアはカールの弟フェルディナントの息子マクシミリアンと婚約しており，この決定は弟の家系への譲歩も意味した．カールは，1516 年と 1519 年に母方の祖父アラゴン国王フェルナンド 2 世と父方の祖父神聖ローマ皇帝マクシミリアン 1 世が死去した際に，後に兄弟で領土の分割を協議するという了解の下ですべての土地を継承し，帝位も獲得したが，オーストリアのハプスブルク家世襲領以外に弟に何も譲らず，これにフェルディナント父子は大きな不満を持っていた [5)]．

しかし，その後婚姻によりヴァロア家との対立を解消するという考えに一時的に心を奪われたカールは，1544 年のフランスとのクレピーの和約で，フランソワ 1 世のその時点で生存していた 2 番目の男子オルレアン公シャルルが，自分の娘マリアか弟フェルディナントの娘アンナと結婚し，前者の場合にはネーデルラント，後者の場合にはミラノを与えることを約束した．カールは熟考の末ミラノを与えることを決め，さらにクレピーの和約の規定そのものが 1545 年のオルレアン公の死により反故になったが，その後もネーデルラントの将来について迷った．最終的にカールは，1548 年にネーデルラント 17 州を神聖ローマ帝国の他の部分から分離して単一の政治体とし，翌年フェリペを後継者に指名した [6)]．

フェルディナント父子はこれに不満を持ったが, カールはさらに多くをフェリペに残そうとした. カールは 1531 年に，自分が不在の間も弟が神聖ローマ帝国で指導力を発揮できるよう，弟のために，戴冠されていない皇帝選出者を意味する「ローマ王」の称号を得た．しかし，カールは，温厚な弟と違い性格の激しいマクシミリアンが皇帝となった際に，皇帝の封土であるネーデルラントやミラノをフェリペから奪うことを恐れ, 1550 年に弟に帝位を諦めるよう迫った．結局, 翌年カールは弟に, 皇帝就任後にフェリペをローマ王に選出し, ハプスブルク家の両系統が交互に皇帝となるという妥協を強いた．もっとも，この取り決めは実現しなかった．選帝侯達は, 長い間皇帝の代理を務め, 宗教問題で妥協的な態度をとったフェルディナントとその子を支持し，彼らが熱烈なカトリック信仰を持つ外国人とみなしたフェリペに強い拒絶反応を示した．フェリペは，1555 年にローマ王への要求を自ら取り下げた [7)]．

こうして，マクシミリアンとその子孫がオーストリアと帝位を継承し，フェリペとその子孫がそれ以外を継承するという形で, カールの帝国は 2 系統に分割された．この分割には, どれほどの戦略性があったのか．歴史家達は，ハプスブルク家が帝国の防衛について考えた時，ネーデルラントが最大の焦点となったと合意しているが，彼らがどのような計算からネーデルラントの問題に対処したのかについて，いまだ意見の一致を見ない．例えば，M. J. ロドリゲス＝サルガドは，分割された帝国は，ハプスブルク家内部の継承をめぐる争いの結果にすぎず，そこに戦略性を見出すことはできないと断じたが，彼が問題としたのは，ネーデルラントの防衛が神聖ローマ帝国の資源に依存しており，また，北ヨーロッパと地中海世界という全く異なる地域に属するネーデルラントとスペインの利害が調和不可能であるにもかかわらず，ネーデルラントを神聖ローマ帝国から切り離してスペインと合同したことである [8)]．

これに対して，ヘンリー・ケイメンは，カールが両地域のつながりを維持した理由として，自らが幼少期を過ごした土地への愛着という感情的な要因に加え，ネーデルラントの経済的重要性を挙げ，カールの決断が合理的であったと示唆した[9]．ネーデルラントの経済的重要性に関する評価は難しい．一方で，カールの治世において，その財政的貢献は，絶対額で言えば帝国の諸地域の中で一番大きかったと思われる．事実，1544 年のフランスとの和約の後に，カールの重臣達がネーデルラントとミラノのどちらをオルレアン公に与えるか議論した際，多数は前者の経済的重要性を理由にその維持を主張した[10]．しかし他方で，カールの戦役と財政を詳しく分析したジェームス D. トレーシーが示すように，ネーデルラントはその多大な財政収入にもかかわらず，スペインにおけるピレネー山脈のような堅固な自然の障壁を持たないため防衛が困難であり，その財政は自らの防衛にも十分でなかった．特に，ヴァロア家との対決の重心がイタリア半島から北ヨーロッパへと移動した 1530 年代以降，恒常的にカスティーリャからの財政援助を必要とするようになり，財政的にはむしろ重荷となった[11]．

しかし，いかに重荷でも，殊更名誉を重視したカールにとって，自ら領土を放棄することは考えられず，その防衛のための最善の方法が求められる．こう考えると，カールが，スペインの軍事財政資源なしに帝国を防衛できないという信念から，スペインとネーデルラントのつながりを維持したというウィリアム・モルトビーの見解には，説得力がある[12]．たしかに，ケイメンが特にその著作 *Spain's Road to Empire* で示したように，近代初頭の世界におけるスペイン帝国の華々しい業績は，スペイン人のみならず，イタリアやドイツ，ネーデルラントなど他の支配地の人々の軍事的，財政的協力に負っていた[13]．しかし，ケイメン自身を含め多くの研究者が指摘するように，戦費負担という点では，カールは，その治世の後期にはスペイン，中でも課税への議会のコントロールが弱く，新大陸から大量の銀が流入し始めたカスティーリャへの依存を強めていった[14]．カールが，スペインの資源なしに，神聖ローマ帝国におけるハプスブルク家のリーダーシップもネーデルラントの支配も維持できないと考え，スペインを中心とする帝国の一体性を維持したいと考えたとしても，不思議ではない．

さらに，1544 年のクレピーの和約の履行をめぐる協議の中でカールの顧問達が指摘したように，ハプスブルク家がネーデルラントからフランスを脅かすことで，その行動を抑制できたことも重要である[15]．オランダ史の大家ジョナサン I. イズレイルによれば，ネーデルラントの防衛は地形上の困難を伴ったが，この問題はフランス側でより大きかった．ネーデルラント側では，地域に特徴的な数多くの河川や堤防や運河を要塞と組み合わせてある程度防衛を強化できたが，フランス側には同様の自然の障壁はなく，ネーデルラントからフランス領を脅かすことは容易であった[16]．

もちろん，そもそも祖父母の遺産を弟に分け与えようとしなかったカールが，心情的な理由から，自分の遺産を直系の子孫にできる限り残そうと望んだことに疑いはない．カールはその治世において，家の権利や自らの名誉の防衛，キリスト教世界の統一といった非近代的な目的を，常に重視してきた．しかし彼は，長い治世の中で，これらの目的を実現するためには相応の外交，軍事，財政戦略が必要なことを学んだ．ジェフリー・パーカーは，スペインによる後のネーデルラントの反乱鎮圧の失敗を，スペインが軍事技術においては時代の変化に上手く対応した一方で，軍隊展開の背後にある政治目標が騎士道と十字軍の時代から進歩しなかったことに帰したが[17]，これに先立つカールの時代にも，対外政策の目標が中世的でありながら，それを実現するための軍事，財政戦略は徐々に合理的で近代的になりつつあるという，目的と手段の近代性における差はすでに見られた．この意味で，カールの治世末期の帝国の分割にも，一定の戦略的計算が働いたと考えるのが妥当であろう．事実，スペインとの結合によってもネーデルラントの防衛が容易でないことを認識したカールは，より大胆な外交戦略に打って出る．次節では，まさにその戦略，つまり息子フェリペとイングランド女王メアリーの結婚について検討する．

2. フェリペとイングランド女王メアリーの結婚

前節の検討から明らかなように，ヨーロッパ南部の領土から離れたネーデルラントの防衛は，ハプスブルク家の軍事外交戦略において重要な位置を占めた．問題は，距離に加え，長期にわたる君主の不在

にあった．近世ヨーロッパでは，人々の忠誠を維持するために，地域で生まれ育った君主がその地に居住することが望ましいと考えられた．1548 年にカールがネーデルラントをフェリペに与えることを決意した際，カールは，将来フェリペの第 2 子がネーデルラントを継承することを定めたが，これはネーデルラントをスペインと結び付けつつ独自の忠誠の対象を与える目的を持った[18]．この規定は，最初の妻でポルトガル国王ジョアン 3 世の娘マリア・マヌエラを，1545 年の長男カルロスの誕生後すぐに亡くしていたフェリペが[19]，1553 年に，父カールの妹レオノールと，マリア・マヌエラの祖父で先代のポルトガル国王マヌエル 1 世の間に出来た子マリアとの結婚を考えた際にも，カールの頭に浮かんだようである．1552 年春にフランス国王アンリ 2 世とドイツの新教派諸侯の同盟を相手とする戦争が始まると，ネーデルラントでは戦費負担のための増税への不満が高まり，カールは 1553 年春にフェリペに急ぎネーデルラントに赴くことを命じたが，その際彼が新たな妻を連れてくることを望んだ．2 人の滞在中に将来地域の支配者となるフェリペの第 2 子が誕生すれば，その政治的安定に寄与するからである．しかし，夏にフェリペとイングランドの新女王メアリーとの結婚の可能性が急浮上すると，カールはネーデルラント防衛のためのさらに魅力的な方法を思いつく．ネーデルラントとイングランドの連合である[20]．

メアリーは，よく知られているように，ヘンリー 8 世とその最初の妻キャサリンの娘であるが，この 2 人の結婚にもネーデルラントはかかわっている．キャサリンは，カトリック両王の末子として 1487 年末に誕生したが，まさにネーデルラントを含む各地におけるフランスの拡張を阻止したいアラゴン国王フェルナンド 2 世とイングランド国王ヘンリー 7 世の同盟を強化するため，1501 年 11 月にイングランド王太子アーサーと結婚した．アーサーは 1502 年 4 月に急死したが，縁戚関係を維持したい 2 人の父親は，翌年，アーサーの弟ヘンリーとキャサリンの婚約に合意した．この結婚は長く実現しなかったが，その理由にもネーデルラントは関係している．1504 年にフェルナンドの妻カスティーリャ女王イサベルが死去した後，フェルナンドとその娘婿でネーデルラントの支配者フィリップ（カールの父）が，カスティーリャの支配権をめぐって争ったが，ネーデルラントのフランスからの防衛を重視するヘンリー 7 世はフィリップとの協力を優先して，フェルナンドとの関係が悪化したからである[21]．

しかし，1509 年にヘンリー 7 世が死去すると，息子ヘンリーは自らの意思で即座にキャサリンと結婚した[22]．2 人の間には 1516 年にメアリーが誕生したが，その後子供に恵まれず，男子を欲したヘンリー 8 世は，1533 年にアン・ブーリンと結婚し，キャサリンとの結婚は無効であったと宣言する．メアリーはこの後庶子扱いされたが，ヘンリーはアンとの間にも娘エリザベスしか得られず，1537 年になって 3 人目の妃ジェーン・シーモアとの間にようやくエドワードを得た．1543 年の王位継承法によって，メアリーは，エドワードとその子に次ぐ継承の権利を得たが，この法はメアリーの庶子の立場を変えず，さらに 1547 年にヘンリー 8 世が死去してエドワードが国王となり，英国国教会のプロテスタント化を推し進めると，メアリーは自分のカトリック信仰に制限を受け，彼女の苦境はさらに深まった[23]．

カールはメアリーの処遇についてエドワードの摂政政府に外交的に抗議し，1550 年にはメアリーのイングランドからの救出作戦まで試みたが，他方で，フランスとの対決においてイングランドを敵に回さないよう注意を払い，メアリーが信仰の問題で弟と過度に対立しないよう説いた[24]．このような中，1553 年にエドワードの健康が急速に悪化したことは，カールにとって期待と不安を共に抱かせるものであった．エドワード自身，そして 1549 年以降若い王を補佐して実権を掌握してきたノーサンバーランド公は，女王メアリーの下でのカトリック回帰を恐れ，ノーサンバーランド公の 6 男と結婚したヘンリー 7 世の曾孫ジェーン・グレイによる王位継承を画策した．メアリーが従兄カールに依存することを恐れるフランス国王アンリ 2 世も，彼女による継承を嫌い，ノーサンバーランド公に支援を申し出た．カールは，メアリーによる継承を望みながら，自分がそのために介入する力がないことを認識し，エドワードを見舞う名目でイングランドに派遣した特使に，中立の立場をとり，ジェーン・グレイの王位継承が実現しそうな場合には，ノーサンバーランド公との友好を求め，フランスの影響力を排除するよう指示した．カールの側近達の中には，さらに，アンリ 2 世が，自分の影響下にある，ヘンリー 8 世の妹マーガレットの孫でスコットランド女王のメアリー・スチュアートを王位につけようと狙っていると疑

う者もいた．1542 年生まれのメアリー・スチュアートは，1548 年にイングランドからの保護を約束したアンリの申し出を受け入れてフランス王太子フランソワと婚約し，それ以来フランス宮廷で暮らしていた．カールとその側近達は，アンリが，彼女にイングランド王位を獲得させ，将来的には，彼女とフランソワの子をフランスとスコットランド，イングランドの支配者にする野心を持つと疑った．これが実現した場合，スペインからネーデルラントへの海上ルートは断たれ，後者の防衛は困難になる[25]．

結局，7 月 6 日にエドワードが死去すると，ノーサンバーランド公はジェーンの王位継承を宣言するが全く支持を得られず，18 日にメアリーを新女王として認めた[26]．メアリーにとって最初の重要な課題の 1 つは，後継者を得るための結婚であった．彼女はカールの助言を求め，カールは慎重にフェリペとの結婚を切り出したが，カール及びハプスブルク側で結婚の交渉を担当したブルゴーニュ出身の大臣グランヴェルやカールの妹でネーデルラント総督のマリアは，両者の結婚を主にネーデルラント防衛の観点から考え，イングランド側と，フェリペとメアリーの間に生まれた子が，ネーデルラントとイングランドを併せた国の支配者となるという合意に達した．将来イングランドが自動的にネーデルラントの防衛に関与することが期待されたのである．結婚条約は，フェリペはイングランドをハプスブルク家の他の支配地での戦争に巻き込まないこと，メアリーがフェリペより先に死去すれば，フェリペはイングランドでの権利を失うこと，カルロスが後継者なく死去すれば，彼の所領もフェリペとメアリーの間に生まれた子が継承することを定めた．また，フェリペは国王の称号は得るが，メアリーと共同でしか主権を行使しないこと，フェリペはイングランドの法と慣習を尊重すべきでパトロネージの権利を持たないことも定められた. イングランド国内の外国の君主との結婚への反対に配慮したこれらの規定は, カールが，ネーデルラントの防衛のために，いかに強く 2 人の結婚を望んだのかを示している[27]．

フェリペは父親に押し付けられた条約を嫌い，秘密裡にそれを拒絶する宣言を行った後，1557 年 7 月にイングランドに到着し，メアリーと結婚した[28]．フェリペが最も強く嫌ったのは，おそらく自分の遺産の分割に関する条項であり，事実，1557 年に，メアリーとの間に生まれた子はイングランド王位のみ継ぎ，他のすべての遺産はカルロスが継承するという遺言を残した[29]．父カールが自分に対してそうしようとしたように，フェリペも自分の息子 1 人にすべての遺産を残そうとしたが，これは当時の君主の多くに共通する態度であった．他方で，フェリペがイングランド国王としての自分の権限に課された制限をどのように考えたのか，議論の余地がある．ロドリゲス＝サルガドは，フェリペがこれらの制限を名誉に反すると考えたと主張するが，ケイメンは，メアリーとの結婚条約はフェリペの祖父母カトリック両王が結婚した際の条件と大きく変わらず，フェリペが強く反対したはずはないと考える[30]．後者の見方をとるなら，フェリペのイングランド王位獲得はハプスブルク家の威信を増大させたという見方もできるであろう．しかし, 交渉の過程を見る限り, 威信の増大が結婚の主要な目的であったとは考えられない．少なくともハプスブルク側では，結婚は主にネーデルラントの防衛という戦略的な目的のために追求され，まさにその目的を達するために，フェリペは自らの権限への制限を受け入れる必要があった．もっとも，帝国の防衛という戦略的目的を君主間の結婚という前近代的な手段で実現しようとしたことに，この時代の西欧国際関係の過渡期的性格がよく表れているということは言えるかもしれない．

3. フェリペとイングランド

カールやフェリペがメアリーとの結婚を望んだ，前節で触れなかった理由として，国王フェリペの下でイングランドのローマ教会への復帰を実現するという願望があった．しかし，この願望は彼らの信仰から来るものではない．それはむしろ，1552 年夏にドイツの新教派諸侯と和解し，宗教的譲歩を余儀なくされる中，イングランドのローマ教会復帰を助けて，彼らのキリスト教世界における威信と教皇庁での影響力を回復するという，非宗教的な動機を持った．実際に，メアリー自身ローマ教会への復帰を心に誓ったが，カールは，それがフェリペとの結婚前に実現しないよう，そのために派遣された教皇特使レジナルド・ポールを，大陸で足止めした[31]．ポール足止めのもう 1 つの理由は，メアリーが，売

却されたカトリック教会の土地の返還に関するポールの要求を認め，それがイングランドで反乱を招き，メアリーとフェリペの王位を脅かすという危惧にあった．フェリペはイングランド到着後，教皇及びブリュッセルに足止めされたポールと交渉し，土地の返還なしにローマ教会への復帰が認められるという確信を得てから，11 月にポールを受け入れ，イングランドはローマ教会へと復帰した[32]．イングランドの宗教的解決に関するカールやフェリペの態度は，ハプスブルク家の政治的利害によって決定された．

しかし，宗教問題を除き，フェリペの 1 度目のイングランド滞在は成果を挙げなかった．議会によるフェリペの戴冠の拒否は，彼が重視した名誉を損なった．この問題も，メアリーとの間に跡継ぎが誕生すれば，次期国王の父親としてフェリペの権威は高まり，自然と解決したかもしれない．しかし，妊娠していると思われたメアリーが実は妊娠していなかったことが 1555 年夏には明らかになる．フェリペは 9 月に，予てからの父カールの要請に従い，メアリーを残してネーデルラントに向かった[33]．目的の 1 つは，カールからネーデルラントの支配を受け継ぐことであり，これは 10 月末に実現した．翌 1556 年に，カールは，すでにメアリーとの結婚を機にフェリペに譲ったナポリ王位に加え，スペインやシチリアの領土も譲渡し，正式の退位は 2 年後のことであったが，実質上神聖ローマ皇帝位からも退いた[34]．

さて，この間も，アンリ 2 世との戦争は続いた．イタリアでは，1555 年 5 月に反ハプスブルク派のジョヴァンニ・ピエトロ・カラファが新教皇パウルス 4 世となって 10 月にアンリと同盟を締結し，ハプスブルク側は守勢に立たされた．キリスト教世界の盟主を自認するハプスブルク家にとって教皇との戦争は益ないものであり，フェリペは自らの権利と名誉を損なわない和平を得ることを望んだ．1556 年 2 月にアンリは財政的困難から休戦に応じたが，パウルスはハプスブルク家への挑発を繰り返し，アンリも 1557 年 1 月にはネーデルラント国境で休戦を破った．いまだ戦場で軍を率いた経験のないフェリペは，満足できる和平を得るためにも，軍事的成功によって自分の威信を確立する必要を強く感じた．このような中，フェリペは，北部戦線でネーデルラントとイングランドの共同作戦によってフランスに打撃を与えるという戦略に傾倒していく．フェリペは，1542 年の対仏同盟条約を根拠に，イングランドの対仏宣戦布告を迫ったが，枢密院は 1554 年の結婚条約の規定が優先すると主張し，これを拒否した[35]．

1557 年 3 月，イングランドの参戦を得るため，フェリペはイングランドに帰還する．枢密院は再び宣戦布告を拒否したが，4 月に，フランスに亡命していたプランタジネット朝の血をひくトーマス・スタッフォードが僅かな兵力と共にスカーバラに上陸して反乱を試みたことは，その惨めな失敗にもかかわらずフェリペを助け，6 月にメアリーはアンリに対して戦争を宣言した．フェリペは，英仏海峡の制海権を確保するためのイングランド海軍の協力，そして，ペンブローク伯率いる 7 千の陸上兵力も得て，7 月にブリュッセルに戻る．8 月には，サヴォイ公率いるハプスブルク軍は，サン＝カンタンの救援に訪れた総司令官アンヌ・ド・モンモランシー率いるフランス軍に圧勝した．カレーからのイングランド軍の到着をカンブレーで待ったフェリペは戦闘に加われなかったが，この勝利は彼の威信を高めた[36]．

しかしながら，フェリペとイングランドの戦争協力が円滑に進んだとは言えない．フェリペはネーデルラントや北フランスでの作戦へのイングランド海軍の協力を重視したが，1557 年 8 月に，アンリ 2 世の同盟者スコットランドの軍がイングランドに侵入した後，イングランドは海軍を英仏海峡から北方に移動させる．逆に，イングランドはフェリペがスコットランドに宣戦布告することを期待したが，戦線を拡大したくないフェリペはこれを拒否し，イングランド側に大きな失望を与えた[37]．

また，サン＝カンタンでの勝利の後，フェリペは，アンリがカレー攻撃を計画しているとイングランド側に警告したが，適切な措置は取られず，1558 年 1 月にカレーは陥落した．フェリペはカレー奪回のための軍事協力を申し出たが，枢密院は兵力と資金の不足を理由に挙げ，熱意を見せなかった．フェリペは，イングランド側が，カレー奪回の責任を自分に押し付けようとしていると疑うようになる[38]．

さらに，フェリペが対スコットランド宣戦を拒否した 1 つの理由は，ネーデルラント商人とスコットランドの貿易にあり，彼がイングランドよりもネーデルラントの経済利益を優先したことも，摩擦の原因となった．例えば，イングランドでの商業上の権利をめぐるイングランドの商人とハンザ都市の商人の争いでは，ネーデルラントが後者による中東欧からの穀物輸入に依存しているため，フェリペは前者

の肩を持たなかった．また，ネーデルラント商人が陥落後のカレーでフランス軍に物資を売り，フェリペが，フランスでの商業活動に関してネーデルラント商人にすでに与えた許可を取り消さなかったことも，怒りを買った[39]．逆に，増税に加え，数年先までの税収や王領地を担保にして，国際金融家から高利の借金をして戦争を戦うのが常であった当時の西ヨーロッパで，健全財政にこだわるイングランド政府が，同様の方法によるフェリペのための戦費調達を拒否したことに，フェリペは不満を持った[40]．

このような状況で，フェリペは 1558 年にはイングランドへの関心を失いつつあったと言われる．しかし，当時のヨーロッパで，外国生まれの，あるいは長期間不在の君主への反発，そして，同一の君主に支配される異なる地域の間での利害調整の難しさは，当然のことであり，だからこそ，ネーデルラントは帝国の弱点となった．いまや帝国の中核となったスペインでも，1520 年には，「外国人」の新国王カールに対する大規模な反乱が発生している．この点で，そもそもメアリーとの結婚交渉にあたったカールやネーデルラントの彼の側近達が，イングランドとの協力を，次世代に至る長い視点で考えたことを，忘れてはならない．フェリペとメアリーの間に生まれた子が，両国の国王になるという規定は，イングランドをネーデルラントの防衛に確実に巻き込む方策であったが，その 1 つの目的は，イングランド生まれのハプスブルク家の君主へのイングランドの人々の忠誠を確保することにあった．この計画は，当の規定を，フェリペが秘密裡に拒否したことによって，最初から半ば躓いた．しかし，例えフェリペの長男カルロスが将来ネーデルラントを継いだとしても，イングランドがフェリペの子，つまりハプスブルク家の君主によって統治される可能性はあった．

イングランドへの不満の高まりにもかかわらず，その戦略的重要性は否定すべくもなく，フェリペ自身も，問題に長期的な視点で対処する必要を感じていた．フェリペは，1558 年には，財政破綻により和平を決意したが，イングランドも交え 10 月に始まったフランスとの和平交渉では，イングランド国王としての自身の名誉とイングランドとの同盟を維持するため，カレーの返還を得るために努力した．この交渉の最中，11 月にメアリー 1 世が死去し，フェリペはイングランド王位を失ったが，婚姻関係が失われたことによって，フェリペは，カレーを取り返してイングランドとの関係を維持する必要をかえって強く感じた．もっとも，フェリペの財政がカレー奪回のための戦争を許さないことは明らかであり，これを認識した新イングランド女王エリザベスは，アンリとの直接交渉により，フランスが 8 年間カレーを保持し，その後イングランドに返還するか金銭的補償をするかを決定するという妥協に達した[41]．

フェリペがイングランドとの長期的な関係の構築に関心を持ったことは，彼が，メアリーの死の直後に，エリザベスとの結婚を考慮したことからも，明らかである．フェリペは，エリザベスと結婚した場合の一番の問題点を，イングランドへの長期の滞在，つまりスペインからの長期の不在が必要となることだと考えたが，これは彼がメアリーとの結婚の失敗から学んだことを示している．結局，フェリペは，1559 年初頭に，エリザベスがカトリック教を受け容れ，長男カルロスがネーデルラントを継承するという条件で，彼女と結婚する準備があるとエリザベスに伝えたが，エリザベスが 1 つ目の条件を拒否したことで，両者の結婚の可能性は消えた[42]．しかし，フェリペがエリザベスによるカトリック受容を条件としたことをもって，彼の政策全般が主に信仰によって動機づけられたと考えることは，正しくない．フェリペは，1559 年春に，教皇パウルス 4 世が，イングランドのプロテスタント化を進めるエリザベスの破門を決定した際に，これがイングランドでの宗教的内戦とメアリー・スチュアートによる王位獲得に至ることを恐れて，強く反対した[43]．結婚によるハプスブルク家とテューダー家の合同がならなかったとしても，ヴァロア家によるイングランド支配を防いで，ネーデルラントの安全を守るという必要は残ったのであり，1550 年代末に至っても，フェリペは政治的な考慮から国際政治における宗教の問題に対処した．この点でも，世紀半ばの西欧国際関係は，その前半期との強い継続性を示していると言えよう．

おわりに

フェリペは，1559 年 4 月に締結されたフランスとの和平条約，カトー＝カンブレジ条約の合意に従い，アンリ 2 世の娘エリザベートを 3 人目の妻に迎えた．婚姻関係によりヴァロア家との平和を維持し，帝国の安全を守るという方策も，父カールの時代から繰り返し考慮されてきたものである．このように，1550 年代の西欧国際関係は，その終わりに至っても，世紀前半と大きく変わるものではなかった．そこでは，家の権利や君主の名誉を守ることが最も重要な目的として追求されたが，これらの前近代的な目的を実現するにあたって，戦略的な思考も芽生えつつあった．しかしながら同時に，君主間の結婚に代表されるような前近代的な方策が，彼らの戦略の重要な部分を占めた．こういった観点から見れば，フェリペとメアリーの結婚はごく当たり前のことであり，2 人に後継ぎが生まれた場合に，ハプスブルク家の戦略が成功しなかったと考えるべき，大きな理由はないように思われる．

しかし同時に，1550 年代は，ドイツにおいて父カールが宗教的妥協を強いられたのみならず，ハプスブルク家の最大のライバルであるフランス，そして何よりもハプスブルク家の領地ネーデルラントで新教が急速に拡大し，人々が，カトリックとプロテスタントの対立を，西欧国際関係の新たな構図として強く意識するようになった時代でもあった．事実，1560 年代には，ネーデルラントで宗教を 1 つの重要な理由とする反乱が発生し，ハプスブルク家の支配は維持できなくなっていく．このような時代に，ハプスブルク家によるイングランドの支配が可能であったのかは，大きな疑問である．フェリペ自身も，エリザベスによるカトリック教の受容を結婚の条件とした際に，おそらく，宗教が重要性を増し，宗教的な統一性の喪失が国の安定を脅かす，新たな時代の到来を予感していたに違いない．この新たな時代の西欧国際関係を検討することが，次の大きな課題となるであろう．

注

1） 拙稿「ヨーロッパにおける国際関係の出現」*Mukogawa Literary Review*, 46（2010）, 43-58.「ヨーロッパ国際関係の幕開け？―1494 年のフランスのイタリア侵攻―」同上 , 47（2011）, 35-73.「ハプスブルク帝国の覇権？―1510 年代末～ 1520 年代の西ヨーロッパ国際関係―」同上 , 48（2011）, 49-81.「カール 5 世，フランソワ 1 世，オスマン帝国，プロテスタント教徒―16 世紀前半のヨーロッパにおける宗教と国際政治―」同上 , 49（2012）, 57-92.

2） Richard Bonney, *The European Dynastic States, 1494-1660*, Oxford University Press, Oxford, 1991, p.131.

3） William Maltby, *The Reign of Charles V*, Palgrave, London, 2002, p.107.

4） M. J. Rodríguez-Salgado, *The Changing Face of Empire: Charles V, Philip II and Habsburg Authority, 1551-1559*, Cambridge University Press, Cambridge, 1988, pp.36-7.

5） Maltby, *Reign of Charles V*, pp.105-6.

6） Maltby, *Reign of Charles V*, pp.107-8. Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, p.37.

7） Maltby, *Reign of Charles V*, pp.106, 108-9. Wim Blockmans, *Emperor Charles V, 1500-1558*, Arnold, London, 2002, pp.11-12.

8） Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, p.40.

9） Henry Kamen, *Spain, 1469-1714: A Society of Conflict*, Third Edition, Longman, London, 2005, pp.75-6.

10）Henry Kamen, *Philip of Spain*, Yale University Press, New Haven and London, 1997, pp.27-8.

11）James D. Tracy, *Emperor Charles V, Impresario of War: Campaign, Strategy, International Finance, and Domestic Politics*, Cambridge University Press, Cambridge, 2002, pp.53-4, 107-8, 272, 302. See also, Maltby, *Reign of Charles V*, p.70.

12）Maltby, *Reign of Charles V*, pp.109-10.

13）Henry Kamen, *Spain's Road to Empire: The Making of a World Power, 1492-1763*, Penguin Books, London, 2002.

14）Kamen, *Spain*, pp.90-5. J. H. Elliot, *Imperial Spain, 1469-1716*, Penguin Books, London, 1963, pp.199-207.

15）Geoffrey Parker, *The Grand Strategy of Philip II*, Yale University Press, New Haven and London, 1998, p.89.

16）Jonathan I. Israel, *The Dutch Republic: Its Rise, Greatness, and Fall, 1477-1806*, Oxford University Press, Oxford, 1995,

p.131.

17）Geoffrey Parker, *The Army of Flanders and the Spanish Road, 1567-1659: The Logistics of Spanish Victory and Defeat in the Low Countries' Wars*, Second Edition, Cambridge University Press, Cambridge, 2004, xv.

18）Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, p.78.

19）Kamen, *Philip of Spain*, pp.12, 20.

20）Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.49-50, 78-9.

21）R. B. Wernham, *Before the Armada: The Emergence of the English Nation, 1485-1588*, Harcourt, Brace & World, Inc., New York, 1966, pp.27-61. David Loades, *Henry VIII*, Amberley, Stroud, 2011, pp.36, 42-8.

22）J. J. Scarisbrick, *Henry VIII*, Pelican Books, Harmondsworth, 1972, pp.28-9. Loades, *Henry VIII*, p.56.

23）Loades, *Henry VIII*, pp.229-30, 317-8. David Loades, *Mary Tudor*, Amberley, Stroud, 2011, pp.93-128.

24）Loades, *Mary Tudor*, pp.108-17.

25）Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.79-80. Loades, *Mary Tudor*, pp.124-8. David Loades, *Mary Tudor: A Life*, Blackwell, Oxford, 1989, pp.171-4.

26）Loades, *Mary Tudor*, pp.124-35.

27）Harry Kelsey, *Philip of Spain, King of England: The Forgotten Sovereign*, I. B. Tauris, London, pp.51-65. Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.80-3. Loades, *Mary Tudor*, pp.139-48.

28）Loades, *Mary Tudor*, pp.154-60. Kelsey, *Philip of Spain, King of England*, pp.67-87.

29）Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, p.83.

30）Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, p.82. Kamen, *Philip of Spain*, p.55.

31）David Loades, *The Reign of Mary Tudor: Politics, Government & Religion in England, 1553-58*, Second Edition, Longman, Harlow, 1991, pp.67-9.

32）Loades, *Reign of Mary Tudor*, pp.166-7. Loades, *Mary Tudor*, pp.169-72. Kelsey, *Philip of Spain, King of England*, pp.97-9, 101-2.

33）Loades, *Reign of Mary Tudor*, pp.169-75. Loades, *Mary Tudor*, pp.180-3.

34）Kamen, *Philip of Spain*, pp.63-4. Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.130-1.

35）Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.137-53, 169-73. Kelsey, *Philip of Spain, King of England*, pp.125-8.

36）Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.173-9. Kelsey, *Philip of Spain, King of England*, pp.128-36. Loades, *Reign of Mary Tudor*, pp.304-13. Loades, *Mary Tudor*, pp.199-210.

37）Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.174-5. Loades, *Mary Tudor*, pp.216-7.

38）Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.179-82. Kelsey, *Philip of Spain, King of England*, pp.136-44. Loades, *Reign of Mary Tudor*, pp.316-21.

39）Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.174, 195-6. Kelsey, *Philip of Spain, King of England*, pp.128-38. Loades, *Reign of Mary Tudor*, pp.311, 322. Loades, *Mary Tudor*, p.224.

40）Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.183-8.

41）Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.310-18.

42）Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.319-22.

43）Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.323-4, 330-1, 334-5.